

スペシャル対談

清水順子学習院大教授 × 早稲田会長

新年最初の特集は、清水順子学習院大教授をお招きして実施した、当会早稲田祐美子会長とのスペシャル対談(平成28年9月実施)をお送りします。

同窓生であるお二人の大学時代のご様子、それぞ

れの就職活動、職業人としてのこれまでの歩み、グローバル化と日本としての対応などについて、お話をうかがいました。新人・若手弁護士、特に働く女性に向けての力強いメッセージもいただいております。



清水 順子
●Junko Shimizu
学習院大学経済学部教授



早稲田 祐美子 (37期)
●Yumiko Waseda
会長

◆ 編集部 ◆

鈴木 茂生 (46期) ●Shigeo Suzuki
広報室室長、NIBEN Frontier 編集長

高山 烈 (56期) ●Akira Takayama
広報室嘱託、NIBEN Frontier 編集部

花井 ゆう子 (62期) ●Yuko Hanai
広報室嘱託、NIBEN Frontier 編集部

1 学生時代

高山 お二人は一橋大学のご出身ですが、知り合ったきっかけについてお聞かせください。

清水 私が経済学部で、岡部さん(早稲田会長の旧姓)は法学部と学部は違ったのですが、女子が大学全体で50名ほどしかいなかったの、自然と顔見知りになったという感じです。

早稲田 大学は本当にこじんまりしたところで、建物も学部ごとに分かれていなかったのですね。

清水 やっぱり、岡部さんは元気がよくて目立っていたというのがすごくあって。

早稲田 そうですか。

清水 おとなしい人だと、会っても「こんにちは」で終わっちゃうけれども、最初から会えば何かしら話をするという感じです。

早稲田 清水さんは経済学部だからものすごく頭がいいと思って。

清水 いやいや。とんでもないです。

早稲田 理系の学部がない大学なので、どちらかという文系頭の人がそろっていて、その中で経済学部ってやっぱり数学ができる方が集まっているから、雰囲気ちょっと違うんですね。法学部はだいたい、数学が苦手な人が来ますので（笑）。

清水 私はその場で考えて何とかしようとするタイプなので、一生懸命覚えてというのは苦手なんです。最初は、教職も取ろうと思って、民法の授業を取ったんですが、そこでもう脱落しました。とても無理だなという感じで。数学や数字は、その場で考えられる余裕があるじゃないですか。

早稲田 そうかな（笑）。最初から発想が違いますね。それはね。

鈴木 先生方の学生時代は、その時代を象徴するものってどんなものがありましたか。

早稲田 70年安保ももう終わってましたからね、我々のときは。

清水 そう、私たちはすごいノンポリで。

早稲田 そうですね。一橋は結構自由な学校で、立て看板とかもたくさん立っていましたが、でも私たちはあんまり関心はないという感じでしたね。

清水 そうですね。ただ女性に関しては、まだ男女雇用機会均等法施行前でしたし、そもそも一橋に女子学生がいるとは企業も思っていなかったんですね。だから、採用もほとんどなくて、行政法の授業を取って公務員になる人がわりと多かった。

早稲田 そうですね。女子は。男子は、もうすごい。

清水 就職天国みたいな。

早稲田 ものすごいですね。民間企業に引く手あまたというのが一橋の男子で。

清水 私は経済学部の野口悠紀雄先生のゼミ所属だったんですけど、みんなすごい就職がいい中で、私はそういう輪には入れなくて、最初は外資系に就職しました。

鈴木 そちらの方が難しいんじゃないかと思いますが。

清水 今では外資系の金融機関に東大生が

行くというので驚くのですが、当時は、国立大学の経済学部の女の子なんてバンカメ（バンク・オブ・アメリカ）かチェース（チェース・マンハッタン銀行）に行けばまあましなぐらいで、なかなか日本の大手金融機関などには就職できない時代だったと思います。

2 職業人としての歩み

1 為替ディーラーとして

鈴木 外国語が使えないとお仕事ができない職場じゃなかったですか。

清水 本当はそうなんです。私が就職したチェースは、同期はほとんど海外留学経験者や帰国子女で、英語がぺらぺらの人たちばかりで。私は経済学を勉強していたので、審査部要員の目的で採用していただいたところを、「為替に興味がある」と言っていたら、たまたま為替部長がそれならいいよという形で、為替資金部に最初から入れていただいて。

早稲田 でも、清水先生が大学時代に所属していたアイセック（AIESEC）って英語での活動ですよね。

清水 そう。でも英語はそれほどしゃべれなかったんですけどね。海外にインターンシップを出したり受け入れたり。私は受け入れる方をやっていて、自分では行かなかったの。

あと、一応国家上級はゼミ生みんなで記念受験に行ったりしましたが、もちろん落ちこちて。今、財務省で外為審などの審議委員をやっているんですけど、私にとっては夢みたいな話ですね。当時入れなかったところに行って、先生と言われると、いや、おかしいなとか思ったり（笑）。

早稲田 そうですか。

清水 本当にそうです。ここ、昔入れなかったのになっていつも思って。

高山 どういう経緯で為替に興味を持たれるようになったんですか。

清水 アイセックの先輩に、たまたま日本興業銀行（IBJ）とか東京銀行に入られて、為

替関連の仕事をされていた方が何人かいらして。ちょうど、実需原則の撤廃といって、要するに貿易取引はなく、投機目的で為替の取引ができますよという規制緩和が始まったのが1984年で、私が就職したのが1982年。これから取引が増大するというので、注目される時期だったんですね。その話を聞いて面白いなと思っていたから、どうせやるならそういうことがしたいって、あんまりよくも知らずに言っていたという。

早稲田 野口悠紀雄先生のゼミでは何を勉強されていたんですか。

清水 公共経済学。だから財政学とはちょっと違うんですけど。

早稲田 ゼミの関係ではないわけですか。

清水 金融ではないですね。

早稲田 そうなんですか。



清水 どっちかと言えば財政政策に近い話ですね。

高山 その後、大学院へ進学されるわけですが、それまでのかなり長い間、一貫して為替ディーラーをされていたんですか。

清水 そうですね。先ほども申し上げましたように、私が為替ディーラーになってから実需原則が撤廃されたので、輸出為替を持ってきて為替ドルを売るという時代から、いろいろな人が為替でもうけようと変化し、どんどんマーケットが大きくなっていった時代でした。プラザ合意が発表されたのが1985年なんですけど、その前というのは日本の貿易収支で黒字がすごく大きくなった時代で、日本とか円が注目されていた時代でした。だから

為替相場もいろいろなニュースでよく動いたりして。本当に仕事は面白くて、退屈とか、業務で仕事行かなきゃという感じはなかったですね。本当に楽しかった。早朝から夜中まで働いていてもすごく面白いという。

鈴木 『ウォール・ストリート』という映画があって。朝起きるともう自宅でモニターを見て相場の動きを確認して、夜までというような感じでしょうか。

清水 そんな感じですよ。最初は下っ端でしたので自分でトレーディングはしませんでした。3、4年目ぐらいからはちょこっとずつできるようになっていくと、実際そうですね、マーケットが開いている時間はトイレも行けないというぐらい。走って行ってくるみたいな。でも面白かったですね。

早稲田 あの当時はどうやってトレードをやっていたの？

清水 あの当時はテレフォンマーケットが主体です。テレフォンマーケットでブローカーにつないで、後はダイレクトに電話をかけて、今プライスがいくらみたい。モニターでトレードするというのも始まってきた時代でした。

実は、私は就職3年目にどうしても海外のマーケットでやってみたくて、IBJロンドンが採用してくれることになったので、会社を辞めてロンドンへ行ったんです。でもその時も上司が、「そんな海外に女の子1人で行かないで、このままここにいたら、いい職場だからいいところにお嫁に行けるから」って反対されたぐらい、女性に対して保守的な世の中だったんです。

早稲田 そうですか。

清水 でも、「いや、ロンドンに行きます」みたいな感じで、ちゃっちゃかロンドンに行き、それでプラザ合意があったりしたので、すごく面白かったです。

高山 ロンドンにはどれぐらいの間いらしたんですか。

清水 その時は2年間、IBJロンドンにお世話になりました。その後1986年から男女雇用機会均等法が施行されると言うし、IBJ本店

(東京)が採用してくれると言うので、1986年にロンドンから本店に移りました。

高山 チェースに入った後、IBJに入って、セパック、バンカメ、モルガン・スタンレーにもお勤めだったんですね。

清水 IBJを辞めた後、セパックという西海岸の銀行に呼んでいただいて。その後、夫がロンドンに転勤になったので一緒にロンドンに行ったところ、セパックのロンドン支社から来いと言われて、そのままセパックのロンドン支社に行ったら、セパックとバンカメが合併になってしまっただけ。ある日銀行に出勤したら、モニターに合併のニュースが流れて、みんな、「えー、うちの銀行はどうなるの」とびっくり。合併となると、銀行は毎日お金を動かしているのだから危ないわけですよ。置き土産に変な取引をしていったら、まずい。なので、3日後にはもう支店閉鎖ですよ。

早稲田 そうなんですか。

清水 とりあえずいったん、みんなを。

早稲田 クビにするわけ。

清水 クビ。

早稲田 やっぱり外資というのはドラスチックですね。



清水 でもそれはリダンダントと言って、つまり我々社員の都合じゃないし、悪いことをしたわけでもないのだから、一時金をもらってクビになる。次の職場の交渉はバンカメロンドンとしてくださいみたいな感じで。私は日本人1人だったので、バンカメロンドンがそのまま雇ってくれたので、ボーナスと休暇をもらって勤め先が変わったという感じでした。

その後夫の転勤で日本に戻ってきた時は、たまたまモルガン・スタンレーが採用してくれたのでそのまま行っただけ。だから履歴書に書くといろいろ勤務先が変わっているのだから、いかにもふらふらしているみたいなイメージになってしまうんですが、そうではなくて、結婚したり、転勤になったり、会社が合併されちゃったり、そういういろいろな理由でたまたまそうなったんです。

2 弁護士として

高山 なるほど。さて、早稲田会長のお話もお伺いしたいと思いますが、先ほど均等法の施行の前の就職だということで、いろいろご苦労があったというお話が出ていましたけれども、会長が法曹を志した動機というのは。

早稲田 何で法学部に入ったと言うと、1つは弁護士とか、国連とかがかっこいいと思っていたんですね。あと、何か手に職を付けなければいけないという思いがあって。やっぱり女性の就職事情がよくなかったもので。それもあって、じゃあ、このまま法学部で司法試験を受けようかなと思ったんです。だから、実は私も就職の苦労をしてないんですよ。みんながすごい苦労していたのは横目で見ていましたけど。男性なんか山ほど企業からのリクルートが来るわけですが、女子には来ないんですよ。そういうような時代だったので、今の人たちから見ると考えられない時代ですよ。

清水 考えられないですね、本当にね。

高山 弁護士の場合はまず研修所へ行って、そこから就職という問題が出てくるかと思うんですけど、そのころには女性であるということでご苦労とかなかったのですか。

早稲田 当時は女性がやっぱり少なかったんですよ。司法試験の合格者が500人をちょっと切っていたんですけど、そのうち女性は50人くらいで、だいたい一橋と同じような比率だったんです。その中で、女性は逆に数が少ないので採用してもいいよというところと、いや、うちは女性なんか全然いらんよという

ところとで、両極端に分かれていたんじゃないかなと思います。

裁判官という選択肢もあったんですけど、裁判官だと転職しなきゃいけないし、検察官は考えていないし、というようなことで弁護士になったということです。

当時は、そもそもお客さんが女性の弁護士というのを信頼していない時代で、会うと、「あれっ」と言って。「男性に替えてくれ」と言う時代でした。一方で渉外事務所だと、英語などによる契約書が多いので、お客さんがあまり男性女性にこだわらないという一面があるので、渉外事務所に就職する女性が結構いましたね。逆に、渉外事務所が男性に人気がなかったというのもあったのかもしれないですけど。

高山 清水先生はロンドンに長くいらしたり、日本にも戻ってこられたりする中で、女性ならではの苦労というのは、何かありましたか。

清水 それこそ、日本にいた時には、「女だから」みたいな言われ方をすることはありましたけれども、基本的に海外ではそういうことはなくて。むしろ、女性の為替ディーラーが電話のラインを取っているということが、ロンドンのシティでは有名になりまして。イギリスでは、日本人は女性に仕事をさせないというイメージがあったらしいんですけど、「あそこは日本人の女の子が電話に出てくるよ」みたいな話で。ロンドンマーケットにいた時は、そういう意味で珍しがられているいろんな人に会う機会があったりして、今も含めて女性でいたからこそかえって珍重されたというところはありました。

高山 かえって目立つし、覚えてもらいやすい。

清水 そうすると、知り合いになれるじゃないですか。それこそロンドン市場の花形ディーラーと友達になると、電話をかけたら情報がもらえるわけですよ。「何でこんなに動いているの」みたいなことが聞けるんです。ディーラーって、今のマーケットの動きがどうかという情報をいかに知るかが重要なことで

すが、やっぱりロンドンマーケットにおける日本の銀行というのは、そんなに情報を持っているわけじゃなかったんで、そういうビッグプレイヤーから教えてもらえることは多かったですね。

花井 知識とか理論みたいなものももちろんベースにあるけれども、コミュニケーション能力なども結構大事なんですね。

清水 本当にそうですね。やっぱり、売ったり買ったりしているのは人間ですし、そこに大きなファンドの買いがあるとかそういうのは外からでは分からないじゃないですか。ですから、そういう意味ではちょうどよかったと思いますね。

高山 ディーラーの個人の資質といいますか、ディーラーその方自身が情報をいかに集められるかということが大事なんですかね。

清水 そうだと思います。こっちがいい情報をあげると、相手もいい情報をくれるんです。

3 大学院へ

高山 清水先生は、為替ディーラーとしての生活をされていたのが、がらっと変わって、その後大学院に進学されるわけですけど。

清水 そうですね。

早稲田 どういうきっかけで大学院に進学されたんですか。



清水 ロンドンで2人子どもを産んでいるんですけども、ナニーという仕事がちゃんと職業として確立しているんですね。ナニーを

雇って子どもの世話とか家のことをしてもらう。だから心置きなく仕事をして、アフター5も楽しんでということができたんですけど、日本に戻ってきたら、これがやっぱり大変でうまくいかない。

これは無理かもしれないと思ったので、ちょっといったん仕事はお休みをして。その時ちょうど野口悠紀雄先生が東大の先端研に移られたところで、休みがてら手伝いにこないかと言われて。そこに2年ぐらい通っていたところ、院試が私たちが学生の時には必要だった第二外国語の試験がなくなるなどちょっと簡単になり、なおかつ課程内で doktor が取れるようになってきた時代だったので、その話を聞いて、とりあえず子育てをしながら大学院に行こうかなと。それと、金融工学がすごく発達してきて、私の時代からその通貨オプションみたいな分野が出てきたんですけど、どうしてそのプライシングになるのが納得いなくて、それを勉強してみたいなと思って。

高山 その後、学者になられるわけですね。

清水 大学院に戻って勉強したら、これはもう、とても2年じゃ学びきれないというのと、やっぱり勉強することが面白かったというのと。仕事に戻る話も来ていたんですけども、自分が納得いくまできちんと勉強したというか、最初は修士でやめようと思っていたんですが、このまま doctor にいっちゃおうかなと。

高山 20年近く実際に為替ディーラーとして実務をなさってから、大学院に行かれて、さらに教授になられてという経歴は、かなり珍しい方なんですか。

清水 たぶん私の時代には珍しいですね。ただ私の専門としていることが金融とか為替市場なので、これまたすごいタイミングがいいんですけども、それまでは経済学って理論モデルが主流だったんですけど、コンピューターの性能がどんどんよくなってきて、たくさんのデータを用いて実証分析ができるようになってきたんですね。昔、私たちが一橋で計算機センターで回すと2日かかっていたとい

う時代が、パソコンの統計ソフトでさっと答を出してくる時代になってきて。為替とか、金利の日時データとか、今はティックデータと言われている、分刻みのたくさんのデータを、いわゆる情報ベンダーのブルームバーグとかロイターが研究者に提供してくれるようになり、それを使って研究をするという時代にちょうど当たったんです。

私はマーケットにいたので、どの金利のデータが主要なのかとか分かるんですけど、研究者の人にはそれが難しいのですね。当たり前の話だけど、そういう機械も使えない。私は仕事で使っていたので、マーケットで得た知識を実証分析に使えるというところで、そこがたぶん重宝がられて、著名な先生方の論文を書くためのリサーチアシスタントなどのお仕事とかをやらせていただきました。

面白かったというのと、自分が役に立っているというのと、実務経験が学問に活かせる時代とちょうどうまくマッチしたということで、そのまま学者の道に進んだという感じです。

4 知財の分野へ

高山 片や、早稲田先生はというと、やはり知財の分野に非常にお強いというイメージを持っている弁護士がほとんどだと思うんですが、早稲田先生が知財の分野を専門にしていたのは、どういう経緯だったのですか。

早稲田 これはたまたまです。銀行員の父親が、銀行の後に入社した会社がビデオゲームづくりの非常に盛んなところだったというのが1つ。もう1つは、当時は、知財と言わなくて無体財産権と言っていたんですけど、一橋は無体財産権の授業がなかったんですけど、私が修習生のころ、日立IBM産業スパイ事件というのがちょうどあったところで、こういう業界もあるんだねと。知財は比較的今まであんまり人がやっていなくて、かつその法律が世間で脚光を浴びだしたという背景がありました。また、さっきの話に戻りますけど、普通に女性の弁護士がやっていくのはまだまだ大

変な時代だったので、何か自分に特色を付けた方がいいんじゃないかなと考えたので、知財にしたんです。

高山 専門性を身に付けたいというのは多くの弁護士が考えることですが、実現するのが容易かと言うとなかなか難しいなと感じている弁護士もこれまた多いのかなと思うんです。その中で、早稲田先生は実際にどうやって専門性を身に付けていかれたんですか。

早稲田 それは知財を扱っている事務所に入ったからです。やっぱり事件がないと、弁護士というのはいくら本を読んでもなかなか身に付けることは難しいので、そういう事務所に入るのが一番早いです。

高山 その就職活動はスムーズにいったんですか。

早稲田 そうですね。当時、渉外事務所も考えたんですけど、渉外になるとやっぱり海外に行ってもかなりハードに働くというがあるので、どうしようかなと思ったんです。

5 実務経験を活かした仕事の広がり

高山 早稲田先生は、現在も弁護士として実務に携わっておられるわけですが、片や、文化庁や特許庁などでいろいろな委員会の役職も務めておられます。その公的な委員会などで、実務家としての経験を活かされていると思うのですが、その辺りの面白さというのはいかがですか。

早稲田 文化庁にしる、特許庁にしる、だいたい何をやっているかという、法律の改正が多いんですね。著作権だったら著作権をどういうふうに変えていきたいと思いますとか、特許をどういうふうに変えていきたいと思いますとか。委員として入っているのは、だいたい裁判所の知財部の方と弁護士と学者で、委員に入っているとその法律の今足りない部分とか、改正した方がいい部分を議論するというのは非常に楽しいです。

学者というのはもちろん研究はすごくしていらっしゃるんですけど、実際に裁判になったらどうなのかなどはあんまりやっていらっ

しやらない、当然ですけどね。そういう意味では、弁護士が入って、そういう審議会でいろいろな意見を言うことの意義はすごくあります。そもそも法律を変えて、その変わった法律を今度はまた裁判で自分たちが使うことになるので、そうするとこの法律はこうの方がいいとか、こうやって使うからこの方が使いやすい、という発言は、やっぱり弁護士ならではのと思うんです。

清水先生も審議会には結構入っているんでしょう。どんな審議会に入っているんですか。

清水 今はジェンダーのせいか、どんな審議会も女性が必要なのではないでしょうか。私たちは就職で苦労したのだけど、この年代でこういう活動をしている女性が実は少ないので、審議会自体はいろいろなところから声がかかる。今は財務省の外為審と関税、文部科学省の教科書検定審議会に入っています。

早稲田 文科省も担当しているんだ。何の教科書をやっているの？

清水 現代社会や政治経済。

早稲田 そうなんですか、それは知らなかった。

清水 あとは、経済産業省の研究所の仕事や、環境省ではESG（環境・社会・ガバナンス）の情報をつくってました。

早稲田 そういうこともやっているんですか。

清水 最初に外為審に呼ばれた時は、ここで何か言わないと、でもまわりは著名な人ばかりでどうしようと思ったんです。

早稲田 女性委員はお1人だったんですか。



清水 最初のころは2人とか3人で、今はだ

いぶん増えましたね。今はもう慣れて好きなことを言わせていただいています。外為審では現在は会長代理をお引き受けしています。でも実際に参加させていただき、すごく勉強になりますね。弁護士の方や、企業の方もいらっしゃるし、私はちょうど企業と学問とに両方分かれるようなところで、そういう政策の意見を聞いているという立場なので、自分の研究のためにもすごく役に立つんですね。

早稲田 やっぱり役所はすごい情報量なんですよ。

清水 そうそう。あとは財務省関連の研究の出張で、最近ミャンマーやカンボジアなどへ行かせていただきましたが、現地で、日本企業の進出や、ミャンマーで証券取引所の開設とか、そういう話をじかに聞いて、これからどういう援助をしていけばいいかなどを考えたりするのは、すごく勉強になります。だから、たまたま女性ということで各審議会の委員に選んでいただいて本当にありがたいなと思っています。

6 現在の研究内容

高山 アジアに出張されているというのは、取り組まれている研究でいうと、アジア共通通貨単位の関連ですか。

清水 ミャンマーはまだまだそこまで成熟していないんですけど、タイは日本企業が一番進出しているところだし、すごく親日的なんですね。みんなアジア通貨危機以来外資の流入にはとても慎重なのですが、その中でも、日本企業にとってどうしてほしいのか、いくらかでも言ってほしいと言ってくれるぐらいすごく親日的です。私は将来的には決済通貨の共通化とか、そういうことが考えられるんじゃないかと思っています。

ミャンマーとかカンボジアみたいな、金融システムが発達していないところで急激に経済成長が進んでいると、銀行口座は持っていないのに、スマホはみんな持っているという感じになるんですよ。だから銀行へ行くと現金が山のように積まれていて、ビニール袋を

持って札束を受け取っていくようなロビーの壁に、ネットバンキングできますと書いてあったりもして（笑）。

早稲田 そうかもしれない。

清水 セキュリティは大丈夫なの？と思うんですけどね。だから日本の常識では考えられないような、金融の進み方というのがこれから新興国で始まっていくと思うので、そういう中で日本企業が進出するときに、日本はどのようなセキュリティーを求めていくのかなど、やるべきことはたくさんあります。だから、すごくアジアは面白いですね。

高山 アジア共通通貨単位というのは、単純にEUのユーロみたいなものをアジアに当てはめるということかなと思っていたのですが、そういうものでもないのですか。

清水 一時期まだここまで日本経済が停滞していない時、2005年ぐらいにこのアジア共通通貨単位というのをつくったんですね。EUの場合、ユーロを導入するための基準がいくつかあるんですけども、一番大きいのがやっぱり財政赤字。積み上がっている政府債務がGDPの何パーセントを超えちゃいけないというのが条件になっているのですが、それを日本に当てはめると、日本はアウトです。今GDPの200%以上政府債務残高があります。だからこういう話を欧州ですると、アジアも共通通貨単位をつくって見たらどうかなと言うと、だって日本が一番財政赤字を持っているから無理だよねと言われるという、恥ずかしい思いをしたことがあります（笑）。

それは、問題としてはあるんですが、一方でさっきも言ったように、日本企業はやっぱりASEAN諸国にたくさん進出して取引しているので、じゃあ、ASEANだけで共通通貨をつくったらと言うと、そんなのは意味がないと。そこに日本と中国が入って初めて使えるものになる。そういう意味では十分検討する価値はあるのですが、日中韓の歴史的な背景が、いつもネックになっているのが残念です。

花井 今の状況を見ると、実現するという想像がつかない感じです。

清水 ただ、私がヨーロッパにいた時に、

ちょうど欧州通貨危機があってロンドン市場で仕事をやっていたんですけど、あの当時、ユーロになるなんて夢にも思っていなかったし、誰も思っていなかったと思う。1992年のことですけども。でも、ユーロは実現したんですよ。

だから世の中、今おっしゃったようにアジア共通通貨単位だなんて想像もつかなかったけど、そうなったねという時代が絶対来ると私は思っていますし、そういうのがたぶんアジアの経済の安定に資するとみんなが納得すれば、それも有り得る話だとは思いますが。

3 グローバル化と日本社会

早稲田 日本政府も、アジアにはやっぱり力を入れているので、ミャンマーなどでも、法律をつくるのを援助しているんですよ、すごく。ミャンマーではやっとな、知財だと商標法が今度できるというレベルなんですけれど。日本政府は日本の法律システムを輸出してそういう国で使っていただくと、日本企業が進出しやすいので、ものすごく力を入れていますよね。

清水 そうですね。例えばミャンマーでは大和総研と日本取引所が協力して証券取引所もつくりましたが、実はカンボジアとラオスでは韓国、中国がつくっているんです。彼らはつくったあとはあまり面倒みていないみたいで。証券取引所をつくられてもどうやって使うのかが分からないと駄目じゃないですか。それで上場企業数が結局少ない。でも日本は、その辺りも全部丁寧に教えるんですよ。やっぱりそういう日本のよさというのを分かっただけほしい。

早稲田 最近ミャンマーの人が来て、特許庁とかでずっと勉強して、また帰られてみたいなことがありました。日本政府はそこからバックアップすると言うので、もちろん弁護士も何人か、もうミャンマーで大きな法律事務所が支店を出して営業していますけれど、弁護士だけじゃなくて検察官が行って、法律を

つくる支援をするとか、結構そういうところから行っているみたいですね。

高山 早稲田先生がおっしゃったとおり、大きい事務所は、アジアのいろいろな国に支店などをどんどん競うようにつくっているように見えるんですけど、企業がアジアを中心とする海外に進出していく中で、弁護士会、二弁として取り組まれていることは何かありますか。

早稲田 二弁は、東京に3つあるうちで一番若い弁護士会で、一番若いと言っても設立から90年経っているんですけど、いろいろな新しいことをやり始めるのが好きな弁護士会なんです。「魁（さきがけ）の二弁」というキャッチフレーズがありまして、国際委員会がいろいろなところと交流して、例えば弁護士の情報を交換できないとか、そういうことを今ちょうど始めています。

この間、私はスリランカに行ってきたのですが、その時もスリランカのJETROと二弁とでタイアップして何かできないかということをやっています。当然日本から進出するのもそうなんですけど、逆に海外から日本に投資していただくところでタイアップできないかとかですね。

清水 じゃあ、そういうところでは何か似たようなことをしていることになりますね。

早稲田 そもそも、スリランカは、日本の進出企業がすごく少ないんです。

清水 そうですね。

早稲田 一番多いのがやっぱり建設業なんです、ODA（政府開発援助）の関係で。

清水 今、高速道路をつくっているんですよ。

早稲田 進出した商社なんかはほとんどなくて、建設業がたくさん現地に出ているということにちょっとびっくりしましたけど。今後、日本企業が出ていくのに、大手企業もそうなんですけれど、特に中小企業が出ていくときに何かお手伝いができないかなと思って。

清水 確かにそうですね。

早稲田 それは二弁だけでなく、日弁連でも中小企業の海外への進出のサポートができ

ないとか、いろいろとやっているんですが、まだなかなか先が遠いかな、みたいなどころがありますよね。

高山 まだまだというお話もありましたけれども、早稲田先生が実務家として、それから会長としていろいろ見てこられた中で、グローバル化ということについての印象、我々の業界に与える影響についてのお考えというのは何かありますか。

早稲田 アジアは、親日の国もたくさんあるし、アメリカとかヨーロッパがまだ進出していなくて、比較的日本の企業はどんどん進出しているという一面があるので、やっぱり今中心的に日本の社会が進出していくんだったらアジアになるのかなという気はします。

ただアジアでは、最初のうちは中国へどんどん進出して、今度はエグジットが難しくなったという部分があって。アジアは国がたくさんあるので、実は法律事務所も進出できる国と進出できない国がありますし、なかなか難しいかもしれないですね。



高山 清水先生はその国際金融の立場といますか、為替を見られてきて、やはり国際化、グローバル化というのはかなり感じておられますか。

清水 はい。もう日本経済が生き残るにはそれしかないと思っていますし、やっぱり日本経済がこれから持続して成長していくためにはアジアの成長力を取り込むのが一番。地理的にも一番近い。なおかつアジアの人々の多くが、日本の製品、日本のサービスが一番だと納得しているんですね。彼らの所得が上

がれば上がるほど、たぶん日本の財の需要というのはすごく高まると思うんです。

アジアは人口も多くて確実に成長もしているとすると、今後ますますアジアと仲良くすることによって、日本のあらゆる、製造業だけじゃなくてサービス業、法律サービスとかも含めて、いろいろなところで進出していく余地があると思います。そこでさっきもおっしゃっていたような、いかに日本企業が、大企業だけじゃなくて中小企業あるいは個人もうまく進出して、安全にビジネスが進められていくかということの地合いをつくっていくということが、すごく重要になってくると思っています。

私は国際金融の中で、日本企業が現地に行っていてどういう通貨で取引をしたり、どう資金調達をしているかということも調べて研究してきましたけれど、大企業で行われているリスクマネジメントの中に中小企業がいかにインボルブされて、いかにリスクを減らして、円高になっても円安になっても変わらずに安定した収入を確保できるかということもすごく重要です。アジア通貨はドルじゃないわけなので、そういったアジア通貨と円との交換をいかにコストをかけずにすることができるかということも、すごく重要になっています。

早稲田 アジア通貨ってすごく難しいじゃないですか。そうでもないですか。

清水 そう、アジア通貨は最近強くなってきたりもしているんですね。ただ、流動性と言っているんですけど、取引量が少ないとスプレッドと言われる、売りと買いのレートの差が大きくなるので、それが取引コストになります。つまりコストが高いということです。だから、わざわざタイパーツを使わなくてもドルを共通して使っちゃえばいいよね、というのが今までの流れなんです。けれど、中国元がそれでは自分たちのもうけが確保できないので中国元を使って取引しようというのを進めている。それと同時に、タイとかでも周辺諸国でパーツを使おうみたいな動きも始まっていて、少しずつ欧州の昔のマルクとかリラ、ポンド、ペセタなどをみんなが使っ

ていた時代に近づきつつあるのかなと。

早稲田 そうなんですか。

清水 そうなって初めて、じゃあ、何か1つ共通通貨をつくった方が便利だよねという話になってくると思うんですね。みんなでドルを使っていたら便利でいいよねという考えのままだったら、そのままドル基軸が続いちゃうので。そこは少しずつ変わってきているんじゃないかなと思っています。

高山 最近ではイギリスがEUを離脱したりだとか、グローバル化の揺り戻しがあるんじゃないかなんて言われているところですけど、何かその辺りのデメリットというか、難しさとか、ちょっと注意点という視点ではいかがですか。

清水 だからこそグローバルじゃなくて、リージョナリズムとして、世界がごたごたしているときにアジアで結束しようという動きが高まるいいチャンスなんじゃないかと思います。

問題なのは、今の大学生を見ていると、私たちの時代は海外へ行きたいという希望とかありましたけど、今の学生は海外へ行きたがらないんですね。「アジアに行ったら一発逆転あるぞ、若いうちは行っておいでよ」と言っても、「いやー、英語できないから」とか。今の若い人たちの方向性があまり外向きじゃないですよ。

花井 なぜなんでしょうかね。

早稲田 それは日本がいい国だからですよ。

清水 そうそう。

早稲田 日本にいて全部が完結できちゃってるのに、何でわざわざ海外に行くんでしょうというところだと思いますよ。情報も、英語じゃなくて、もちろん英語の方がはるかに大きな情報量なんでしょうけど、一応日本語にみんな訳されて、いろいろな情報が流れ込んでくるし。だからじゃないですかね。

清水 海外に行って流浪の旅に出ますみたいなことは本当はないですよ。うちの大学なんて特におだやかな雰囲気ですから、あまりそういう感じじゃないですね。

早稲田 そうですか。

高山 実際教授として学生に教えていらっしゃるわけですけど、清水先生の授業を取っている子たちの中にはどういう志望の学生が多いんですか。

清水 金融機関で仕事したいという子が多いには多いんですが、でも私も最近気が付いたんです。今の大学生は、もう自分たちが生まれ育ったところからずっと「失われた10年」の、ゼロ金利のどうしようもないデフレの日本で育っている子たちなんですよ。だからたぶん私たちと感覚が違うんだろうなと思うんですよ。我々は、「失われた10年」といっても、日本経済はもっとすごかった、今だけちょっと調子が悪いんだという感覚を、たぶんまだまだ50代から70代の人を持っていると思うんですよ、今が悪いだけみたいな。

でも今の若い人たちは、ずっと悪くていい時代なんて知らない。だから夢をあまりみないとか、いかに老後の資金をためるかとか、どうせ年金はもらえないからとか、もうすごく堅実です、驚くほど。だから、教育をしている側が、今だけ日本はちょっと調子が悪いと思っているような感じと、彼らがその中でずっと生きてきているというのとで感覚を切り替えて、彼らに合わせたいろいろな教育の仕方をしていかなきゃいけないんじゃないのかなと最近思っています。

教科書検定の話もそうなんですが、社会の教科書というのは厚くなる一方なんですよ、昔を切らないから。当たり前の話なんですけれど。私たちのころは吉田茂ぐらいで終わるわけなんですけど、今はもうプラザ合意や、TPPまでも来ているわけですよ。あんな1冊が1年間で終わるわけがない。

早稲田 そうですよ。

清水 あとすごく不思議なのは、大学では私と岡部さんとは経済学部と法学部で、ほとんどかわらない授業だったようなものが、高校では1冊の教科書で社会とされているわけじゃないですか。あれを両サイドともに教えられる人なんて、たぶん高校の社会の先生ではないんじゃないかなって。だからたぶん社会とかの教え方自体が間違っているんじ

やないかなって思っていて。特に最近は金融教育が重要だという話をしているんですが、そこまで行く余裕がない。

早稲田 どこもやっていないでしょう、そんなの。

清水 重要なことまでたどり着かないうちに、社会の授業なんか途中で終わって、あとは受験のための社会になってしまっている。法とは何かとか経済とは何かとか、あるいは金融教育ってすごく重要だと思うんです。自分のライフプランとかどういうふうに生涯の所得を振り分けて考えていかなきゃいけないのかとか全く勉強しない。



早稲田 弁護士会でやっている法教育はすごく評判がいいんです。だからいろいろな学校から来てくださると言われて、特に若い先生に行っていただいて、高校生とか中学生とかを教えてもらっています。

清水 金融もたぶん社会とか経済とかも、そういう生きたもので一緒に考えようという形で教えていかなくちゃいけないのに、いまだに「公定歩合」とか。私がびっくりしたのは、うちの娘が中学生のころに社会の教科書で「こうていぶごう」と読んだので、あなたは誰の娘だと思っているの、みたいな。でもあの子の時代にテレビのニュースや日経新聞に公定歩合なんて1回も出てきていないんですよ。

早稲田 そうかもしれないですよ。

清水 公定歩合はもう使われていないんですけど、でも教科書にはまだ書いてあるんですよ。だからおかしいですよ。少しず

つは変わっていますが、もっと今の時代に合った教科書にしたり、金融教育をしないと、グローバル化のメリットが彼らにとってのメリットにならない。

高山 金融教育というと、我々日本人って、これだけ預金金利が下がっても、お金があると全部貯金しておけばいいと考えている人が多いと思うんですけども、本来もう少し資産運用というか、いろいろな金融商品があって振り分けることができる方がベターじゃないかと。そういう教育が必要ということでしょうか。

清水 そうです。常にリスク分散を考えていかなきゃいけない。だって世の中で何かが起こる確率と期待値というのは確実に計算できるわけです。その時にただ安全だから貯金、お年玉をもらったから貯金というのは世界的には全く乗り遅れている状態です。

私はGPIF（年金積立管理運用独立行政法人）の運用委員をしているのですが、GPIFがいくら損した、国民の年金返せっていう記事がでるととても残念に思います。新聞とか報道は、いかに人々にインパクトを与えるかという見出しで記事を書くので、正しい情報が伝わらないこともあります。法曹の世界の新聞記事というのはどうなんですか。

早稲田 この間ちょうど司法試験の合格発表があったんですけど、「法科大学院ショック」と新聞がこんなに大きい見出し記事を書いてくれて。

清水 そうですよ。なんか変な見出しをほんと付ける。

早稲田 まあやっぱりセンセーショナルですよ。

清水 中身を見るとそれなりに、長期的運用だし、そもそもそこで年金の支払い支給額は影響を与えることはないみたいなことが書いてあるんですけど、目を引きつけたいからと、年金返せみたいな見出しを付けるので、そこだけが頭に残ってしまう。

私が一番心配しているのは、せっかくNISAとかができて、ゼロ金利の世の中で、ちょっとは資産運用で工夫をしないと、自分たちの

生涯給与だけでは自分たちが生活できないんじゃないかということに、本当は若い人たちは気が付かなきゃいけない。新興国の債券を買うとか株を買うとか自分で考えて運用していかないと。財産を増やしていくということを考えなきゃいけないのに、GPIFが株で損したという、株は買っちゃいけないんだ、危ないんだという変な認識を与えちゃうと思うのね。そういう間違った認識を、若い人たちに植え付けちゃいけない。正しい金融知識の下で自分で判断できるような、若い人たちにしていかなきゃいけないわけですよ。

花井 二弁のジュニアロースクールの今年のテーマがまさにそれで、「情報の取捨選択の力をつける」というものでした。新聞報道などでわーっと書かれていることについて、それは事実を書いているのか、それとも書いている人の評価を書いているのか、ちゃんと見分けないといけないよという授業をやったんです。そういう教育がないので。

清水 絶対、金融教育でも必要ですよ。

早稲田 義務教育では、そういう教育は行われてないでしょう。学校ではあるんですか。

清水 だからやりたいんですが、結局カリキュラムがいっぱい過ぎて入らない。

早稲田 ですよ。

清水 そうなんです。もっと若いグローバルな感覚を持った人が、将来の教育を考えていかないと。今の状態ではこのグローバル化のメリットを活かせない。

早稲田 教育できる人があまりいないんじゃないですか。

清水 例えばリタイアした銀行員とか。

早稲田 そうね、そういうのはいいかもしれないですね。

鈴木 やはり金融業界の共通認識なんですか。今まで国も貯蓄から投資へとずっと前から言っていて、なかなか変わってきていなくなって感じなんですけど。もっと投資に振り向けるように日本もしていかないと、というところはいかがですか。

清水 どうなんでしょうね。ただ政策的見地から考えれば、貯蓄ばかりで投資しないと



いう状態は金融政策の有効性にマイナスなのかもしれません。日本もアメリカもリーマンショック以降、大規模な金融緩和をして、アメリカは今立ち直っているわけじゃないですか。でも日本は全然立ち直っていない。その差は何って考えたときに、やっぱりアメリカはみんなが投資したり、株を買ったりしているような国民性なので、当然金融緩和をして株が上がると、その所得効果がある。じゃあ、車を買っちゃおうというふうになるわけじゃないですか。日本もアベノミクスで一時期かなり株が上がりましたが、あのとき株でもうかったから消費しようぜという人は、企業とかお金持ちに限られていて、一般の人はそもそも株を持っていないからいけないわけですよ。そこで緩和が消費に与える効果が限られてきちゃっているというのも1つあるんじゃないかと思うんですよ。

だから、お金があれば貯金するという傾向が続くと、金融政策の効果というのも薄れてきちゃうのかなと。やっぱりもっと広く投資に向かうべきなんだと思うんですね。そういう意味でも金融教育は重要だと思うのです。でも、そこまではまだなかなか。文科省はほかにも英語教育を考えなきゃいけないし、ネット化やクラウド化にどうやって対応していくかみたいな話もあって。やるが多すぎて、そこまで行かないんですよ。

高山 法教育という話が出たんですが、弁護士の役わりとして生徒に教えていくというようなことができると、若い弁護士の働く場所が増えていくようにも感じたんですけど、その辺りの見通しはいかがですか。

早稲田 今は、弁護士会が手弁当でやっていますよね。弁政連（日本弁護士政治連盟）というのがあります。この間、その会員が都議会議員のところに行って、予算措置を付けてくれというのを言いに行ったんですけども、なかなか補助金がね。国って制度はつくりますけど、お金を付けてくれないので、そうすると地方公共団体はさらに持ち出しになっちゃって。地方公共団体の財政って決してよくないので、そっちにお金が回ってこないというところがあるんですよ。

清水 なるほどね。私もGPIFで、もっといろいろいな所に説明をしに行けと言われてたら、喜んで話しにいくと言っているんですけど。今の話もきっとそうだと思うんだけど、いろいろな問題があったときに、それをどこに訴えたら議論して変えてくれたり、そのための予算を付けてくれたりするのかわからないんですよ。

早稲田 やっぱりまだ縦割りですよ。

4 若手弁護士へのメッセージ

1 ワーク・ライフ・バランス

高山 がらっと別の話題に変えたいと思うんですけども。今女性の弁護士、特に若手の弁護士と話していると、非常に悩みが多いなど。弁護士会も改善を進めているという点はあるにせよ、やはり大企業に比べるとまだまだ福利厚生的なところで、なかなか難しいところもあるようです。そこで、先生方は、家庭と仕事の両立について、特にお子さんが小さい時が一番大変なのかなとは思いますが、どういった工夫をされていたのかということについてお聞きしたいのですが。

早稲田 どうですかね。私の場合たまたま夫が、そういうところには非常に理解がありましたし、かつ、たまたまいい保育園に入れました。子どもも、病気がちだということもなく。当時は病児保育ってほとんどなかったので、病気をしたときは私の母親を呼んで来

てもらったりというところに対応していました。あとは、私の勤めていた事務所のボスは、比較的そういうところに理解があったということですかね。

花井 事務所の理解というのは、時間的なコントロールに対してとか、どの辺りについてですか。

早稲田 そうですね、時間的なところもありますね。当時はやっぱり、子どもがいると夜遅くまでなんてとても働けないので。延長保育が19時までだったので、18時すぎにダッシュで帰りたいなそんな感じでやっていました。

ただ、保育園事情は今の方がさらに大変だと聞いていますし、この間、東北弁連に行ったときにお話を聞いた若い女性の弁護士さんは、お子さんが2人いて、国選弁護などは子どもが急に熱を出しても休むわけにはいかないので、そういうのをどんどん減らしていったら収入が半分になってしまったと。なので、半年ある弁護士会の会費の免除期間をもうちょっと延長してほしいという話も聞きました。

だから今、弁護士の中でもインハウスという企業内法務、企業の法務部に入る方が毎月どんどん増えているんですよ。2016年の5月に確か全国で1,700人ほどを突破したんですけど。うちの会が多いので、400人以上が企業内弁護士なんですよ。企業というと、私たちのときは働きながら子育てという世代じゃなかったんですけど、今の企業ってもうそれは当然じゃないですか、少なくとも大企業は。だからそういうところに入る方もすごく多いですし、まあそれもそうよねって思いますけどね。育休制度なんかが大企業にはだいたい完備されているので。

清水 働きやすい。

早稲田 そう。

清水 その期間は休んでも次の職務を保障されている。

早稲田 我々の世代はそんなものなかったから。

清水 ないですよ。

早稲田 私は産休明けから働いていました。

産前6週、産後8週で慣らし保育があったので、6週ぐらいから、保育園にまだ眠ったままで目も開いてないような子を連れて行って仕事してましたからね。その後、育休制度はできましたけど、この業界は、結局育休というのは自分で休むということだから、その間食えないということになるだけで。そこはまだまだ難しいですよ。

花井 先ほどロンドン時代のお話が出ましたけれども、ロンドンではお子さんが2人いてもばりばり仕事ができるということはあったんですか。

清水 2人目が産まれて日本に帰ってきたので、ロンドンでは、1人育ててもらったんです。クオリファイド（資格有り）のナニーという制度があって、もう来た時もすごいしっかりしているベテランのおばさんで、娘を本当にちゃんと教育もしてくれた。だからうちの娘はすごいマイウェイの女の子になっちゃったんです。それはどうしてかという、つまり、彼女のペースに合わせて、お散歩に行くと言っても、あっちって小さいころから革靴を履いているんですけど、革靴のボタンを留めて、帽子をかぶって、コートを着て、ボタンを留めてみたいなのを、全部自分でやる間待っているわけですよ。それで外出するみたいな。人に会ったらきちんとあいさつをしてとか。そういうふうで育てられたから、日本に帰ってきて、幼稚園でマイペースですよって先生に言われたんですけど（笑）。慌てるとか、みんなが行ったから急がなきゃとか、そういう感覚はゼロ。でも、それぐらいきっちりあの子のペースで待ってちゃんと子育てをしてくれたので、その点では、やっぱりお金を払ってそういう専門家に預ける方が安心して外に出られますよね。

だからやっぱり日本も、今はいろいろ外国人労働者をどうやって受け入れていくかということが問題にはなっていますが、女性が働きやすくなるためにはその辺りをもう少しいろいろ考えていただかないと。少なくとも家事についてはお金で解決できて、それがちゃんと費用計上できるみたいな。そういうの

が欲しい。

早稲田 保育料もそうですよね。

清水 入れるべきですよ。あんな少ない基礎控除の38万円なんかじゃやってられないですよ。

花井 働いていますって証明して保育園に入れているのに、それが業務と関係ないって、何か理屈が通らない気がしますよね。

早稲田 確かにね。

清水 ちなみに大学の先生は、春休み、夏休みとか、あと1週間全部授業があるわけでもないで、私が仕事に戻らないで研究者になったのは、たぶん1つには子育てがしやすいこと。ただ、今一番問題になっているのが、実は介護の方で。親の介護が入ってきたら、やっぱり子育て以上に大変です。お金のかかり方も半端じゃないですし、先が見えないじゃないですか。

早稲田 子どもはね、だんだん大きくなって行って楽しいし。

清水 手がかからなくなる。

早稲田 そうですね。

清水 私は両方やってみて、介護の方がより大変だなってつくづく感じています。

高山 またいずれ弁護士会でも介護に取り組むということが、今後はどんどん増えてくるのかもしれないですね。

清水 あと、男の方も介護をしなきゃいけない世の中になってくるから。

早稲田 そうですよ。

清水 大変だと思います。

2 新人・若手弁護士へのメッセージ

高山 残念ながらお時間もありませんが、そろそろ締めということでもまいりたいのですが。新人・若手弁護士に、特に、働く女性に向けて、ぜひ、お二方から力強いメッセージをいただければと思います。

清水 弁護士さんの仕事は、専門的な資格を苦勞してお取りになって、それを糧にずっと仕事を続けるというイメージでは、私の仕事とちょっと似ているのかもって思ったりも

します。先ほど、育休になると無収入になってしまうというお話もありましたが、弁護士の資格は、ずっと長く続くので。私も結構のんびり、いろいろなことをやりながらここまで来ています。そういう意味ではあまりがつつせずに、休む時は1～2年休んでもいいよみたいな形で、その分いろいろな経験を積まれて、子育てしながら子育てで学んで、長い目で見て自分のライフプランを立てて仕事を続けていくことが大切だと思います。私も、モルガン・スタンレーで忙しくてどうしようもない時に、1回仕事を辞めているんですけども、あの時、東大の先端研で2～3年ぶらぶらしていたのが、全然マイナスにはなっていないんです。弁護士になれるような頭のいい女性の方は、やらなきゃ、やらなきゃと思っちゃうかもしれないけれども、その辺りはのんびり構えて、ゆっくり仕事を続けていくというぐらいの考えで進んでいった方がいいのかなと思います。

それと、先ほど話していたように、世界に目を向けて。これまではトヨタが車を海外に売って、アメリカで工場を造って車を売するような、製造業場が海外に進出するという時代でしたけど、今はいろいろなサービスが海外に出て普及するという時代だから、法的なサービスとかも含めてどんどんアジアに進出していくことになるんだとすれば、そういう新しいことにぜひ目を向けていていただきたいなと思います。

高山 ありがとうございます。

早稲田 我々の昔のころに比べると今の方がはるかにいろいろな分野に進出があるんですね。あと、働く女性がもう普通で、今保育園に非常に入りにくいというのは、みんなが子どもを産んでもそのまま働き続けようという方が多いからだと思うんです。私たちの時代というのは、結婚して辞める人はそんなに多くなかったかもしれないけど、子どもが生まれると結構辞めていた時代で。特に民間はそうで。弁護士はそこまではなかったですけど。

それに比べると社会はどんどん、女性だからというのはかなり減ってきたかなと思って

います。そういう意味ではいろいろなところに進出できると思っていますし、さっき言ったインハウスとかもあるし、任期付公務員もあります。まだまだ我々の業界というのは裁判が主流だというふうに、みんなが考えているんですが、実はそれ以外の分野というのはどんどんどんどん広がってきていると思っています。そういう意味では活躍する余地ってたくさんあると思うんですね。

もう1つはやっぱり、清水先生がおっしゃったように、なかなか自分の将来がずっと一直線に上がっていくわけでもないので、ちょっと休むとか、今はちょっとここまでは無理よと。実際私も子どもが小さかった時って、やっぱりそんなに夜遅くまで全然働けなかったですから。そうすると新しいところの仕事とか、会務活動なんて全くやっていなかったの、そういうところはその時はちょっとお休みというか、ちょっと縮こまってもいいから、また長い目で見ていくというのも必要かなと思っています。この業界に来る方というのは、昔から勉強がよくできてみたい人だと、ずっと上がっていかなくちゃいけないみたいなどころがあるのかも知れないんですけど、そんなことはないですから。

高山 ありがとうございます。

**N
AFA**